様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１６６３６

研究課題名（和文）芸術評価のための現代的価値論の構築：アートワールドの多元化をふまえて

研究課題名（英文）Making a theory of artistic value: in the context of diversification of artworlds

研究代表者
森　功次（Mori, Norihide）

大妻女子大学・国際センター・講師

研究者番号：３０７２０９３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「芸術的価値」という概念をあらためて問い直し、その概念の正当性と役割を考察した。その研究の中で見えてきたのは、「芸術的価値」という概念は現代ではもはや不必要かもしれないし、役に立たないかもしれない、という可能性であった。また本研究では、芸術的価値に大きく関わる営みとして、「批評」という営みの意義や機能を分析した。批評の正当性を担保するためには、従来「理想的観賞者」という道具立てが用いられてきたが、本研究で見えてきたのは、いまやその道具立てはあらためて見直すべき時が来ている、という点であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、芸術作品の存在論、美的経験、美的証言、芸術的価値といった分析美学の最新のトピックについて考察を進め、その成果を論文および書籍として発表できた。
　また本研究の成果のひとつに、分析美学の議論を日本に紹介できたという点がある。本研究では、ノエル・キャロルの書籍『批評について』を翻訳したほか、分析美学をテーマとしたワークショップ開催、ブックフェア企画などを行った。

研究成果の概要（英文）： In this research, we reconsider the concept of "artistic value" and assess its validity and function. One of the conclusions of this research is that the concept of "artistic value" might be now unnecessary and even unuseful.
　We also analyze the significance and function of art criticism in contemporary artworld. Traditionally, art theorists apply the concept of "ideal appreciator" as a theoretical tool to explain artistic values, but we might have to reconsider the concept and invent other tools for appropriate criticism.

研究分野：美学

キーワード：分析美学　芸術的価値　理想的観賞者　批評　美的経験　美的判断　日常生活の美学　美的証言

１．研究開始当初の背景

近年の英語圏の美学界では、「芸術的価値 artistic value とはどのような価値なのか」という問題が一大トピックになってきている。この古くさい問いが最近あらためて問い直されているのには、主に 2 つの理由がある。

[1]一つは、現代分析哲学の領域で価値論や美的経験論の精緻化が進み、芸術的価値をめぐるこれまでの議論の欠点が顕になってきたからである。価値判断と作品知覚との関係をどう考えるか、美的性質や芸術的性質といった高次の性質をどう特徴づけるか、価値の規範性と個々人の趣味の多様性との間にどう折り合いをつけるか、こうした問いが近隣分野の議論の発展をうけてあらためて問い直されている。

[2]もう一つの理由としては、現代における芸術の多様化がある。これは単に、伝統的芸術形式から外れる作品群――たとえばコンセプチュアル・アートやインスタレーションなど――の登場によって芸術形式が多様化した、というだけの話ではない。多文化主義、美術の多歴史化などを経た現代においては、芸術制度それ自体がもはや一枚岩ではなくなっている。その複雑化・多層化した芸術制度のなかでは、作品に求められる「機能 function」も自ずと変化している。芸術はもはや観想的観賞のためだけに用いられるものではない。地域振興や金銭的投資、さらには心理療法や児童教育など、さまざまな場面で活用されているのだ。

だが､芸術のこうした多様化を説明するための美学的価値論の構築はいまだに進んでいない。そのため「この作品に価値はあるのか」といった論争は多方面で頻発し、しかも錯綜状態にある。アートワールドが多元化した現在､「作品をどのように評価すべきか」を説明するための価値理論の整備は、たんに哲学方面からだけでなく、より実践的な方面からも求められている。

２．研究の目的

本研究は、現代英語圏の分析美学の領域で行われてきた「芸術的価値」をめぐる論争を整理しつつ、そこに知覚理論や価値論に関する現代哲学の最新の知見を導入することで、芸術的価値についての新たな価値論の構築を目指す。本研究の特色は〈理想的観賞者が見て取る美的価値や認識的価値〉を重視してきた従来の価値論に、「評価されうる価値の多様性（教育的価値、社会道徳的価値、経済的価値など)」や「観賞態度の多様性（とりわけ非理想的な観賞による評価)」の視点を組み込もうとする点にある。これは、芸術的価値についての理解を価値の種類や観賞態度の面で拡張し、現代の多元化したアートワールドにおける芸術評価の複雑性を、理論的に説明しようとする試みである。

３．研究の方法

本研究は以下の 3 つの分析目標を立て、その下位区分にある各問いに答えることを目指す。

1. 芸術の知覚について：美的価値などの高次性質の知覚はどのように特徴づけられるべきか。また、知覚が重要な役割を果たしていない作品の観賞をどのように考えるべきか。

2. 価値判断の規範性を支える理想的観賞者という存在について：理想的観賞にはどのような能力が必要か。また、理想的観賞者を想定することは、一般の観賞にどう影響するのか。

3. 批評の機能について：現代の芸術評価において批評はどのような機能をもつべきなのか。実際の批評実践においては、どのような価値がいかなる論法で批判・擁護されているのか。

研究は 1, 2, 3 の順で進められる。作業 3 の前半までは哲学的な価値理論の構築を目指す。3 の後半では､実際の批評論争を分析することで､本成果の批評分野への応用可能性を提示する。

４．研究成果

まず作品の知覚や直接観賞の問題について、近年の美的証言の議論を踏まえながら考察を進めた。その成果は国際学会や科学哲学会にて発表された。(以下の論文４，および学会発表７，８，９、さらに書籍３)。

次に、理想的観賞者の位置づけやそこから逸れる者の作品観賞経験について、美的規範や美的理由などの議論を利用しつつ考察した。その成果は国際ワークショップや国内ワークショップにて発表された（以下の学会発表１，２，４，５)。

最後に、上記の成果を踏まえつつ、実際の批評の場面や芸術的価値をめぐる論争について考察した。その成果としては以下の論文１，３、および発表２，１０、書籍１、などがある。

これらの成果をふまえて見えてきたのは､従来の美学で多くの採用してきた「理想的鑑賞者」という道具立てを再検討することの必要性である。この課題は次の研究課題につなげつつ、考察を進めていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 7 件）

1. 森功次､「ほんとうに台所からワインを語るために――飯田隆『新哲学対話』第１章「アガトン」から考える」『邂逅、岡山大学哲学倫理学会年報』(33) 2-17 2019 年、査読無
2. 森功次､「現象学の境目問題について美学の観点から答える」『フッサール研究』16 152-160 2019 年、査読無

3. 森功次、「芸術的価値とは何か、そしてそれは必要なのか」『現代思想』2017 年 12 月臨時増刊号　総特集＝分析哲学　154-168 2017 年、査読無
4. Norihide Mori, “Aesthetic experience of bad art: From the point of view of the evaluative approach to aesthetic experience.”*Proceedings of ICA 2016,* 2016, 517-522、査読無
5. Norihide Mori, “Sull’uso corretto delle opere immorali. Sartre su Genet”*Ágalma* (32) 64-74, 2016、査読無
6. 森功次、「戦後の実存主義と芸術」『ベルナール・ビュフェ美術館館報』(1), 5-7, 2016 年、査読無
7. Norihide Mori, “Direct Experience and Artistic Value: A Consequence of the Ideal Appreciator Theory” *transacting aesthetics*, 103-111, 2015、査読有

〔学会発表〕（計 11 件）
1. 森功次、「観賞前にネタバレを読みに行くことの倫理的な悪さ、そしてネタバレ許容派の欺瞞」ワークショップ「ネタバレの美学」（大妻女子大学）　2018 年 11 月 23 日
2. 森功次、「ワインの評価基準の独特なところ」講演会「日常に根ざした言葉で哲学をするということ：飯田隆『新哲学対話』をめぐって」（岡山大学）2018 年 7 月 28 日
3. 森功次、「『ワードマップ現代現象学』著者の一人として応答」フッサール研究会第 16 回研究会、シンポジウム「現代現象学の批判的検討」2018 年 3 月 17 日
4. 森功次、「美的選択と個性：伝統的美学理論からの逸脱とその影響」日本大学文理学部人文科学研究所　第１３回哲学ワークショップ「美的経験、再考！」　2018 年 3 月 16 日
5. Norihide Mori, “Aesthteic Forecast: Some Problems of Hypothesizing Other's Judgment” 国際ワークショップ：Art and Mind（東京大学）　2017 年 8 月 11 日
6. 森功次、「前期サルトルの芸術哲学――想像力・独自性・道徳（博論合評会）」日本サルトル学会第 38 回研究例会　（立教大学）2016 年 12 月 3 日
7. 森功次、「ホラー観賞においてわれわれは本当に恐怖を楽しんでいるのだろうか」（信州大学）日本科学哲学会第 49 回大会　2016 年 11 月 20 日
8. Norihide Mori, “Aesthetic experience of bad art: From the point of view of the evaluative approach to aesthetic experience.”The 20th International Congress of Aesthetics 2016（Seoul National University）2016 年 7 月 26 日
9. 森功次、「Acquaintance Principle と美的証言：美学と認識論の結節点」(首都大学東京)第 48 回日本科学哲学会　2015 年 11 月 21 日
10. 森功次、「芸術作品のカテゴリーと作者性――2015 年 VOCA 展の出品拒否事件を題材に」第 66 回美学会全国大会　（早稲田大学）2015 年 10 月 11 日
11. 森功次、「第二部「サルトルの哲学」登壇」日本サルトル学会第 35 回研究例会　『サルトル読本』出版記念シンポジウム　（立教大学）2015 年 7 月 18 日

〔図書〕（計 3 件）
1. ノエル・キャロル『批評について：芸術批評の哲学』森功次訳、勁草書房、2017 年、p. 296.
2. 植村玄輝・八重樫徹・吉川孝・富山豊・森功次、『ワードマップ現代現象学』新曜社、2017 年、p. 328.
3. 森功次「サルトルの「芸術作品とは非現実的存在である」という主張をどのように受け止めるべきか」小熊正久・清塚邦彦編『画像と知覚の哲学』東信堂、2015 年、p. 131-152.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
ブックフェア「分析美学は加速する」記録 HP
（http://socio-logic.jp/events/201509_aesthetics.php）

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。